

陶都瀬戸市への集団就職

——遠隔地での求人の制度化と若年労働者の転職現象を中心に——

山 口 覚

I はじめに

集団就職をめぐる語りには、後代に創られた不正確だが定型化された神話が含まれる。1954年に運行された「青森発上野行き」就職列車を集団就職の嚆矢とするという神話は特に根強いものである。就職列車がすでに戦時体制下で運行されていたことなどを勘案すれば、この説が誤りであるのは間違いない(山口, 2016)。集団就職の全体像を適切に描くには、高度経済成長期中心の、あるいは上野行き就職列車をイメージの中核とする東京中心の語りを見直す必要がある。もっとも、集団就職をめぐる制度や実施状況に関する資料は散逸し、廃棄されていることも珍しくない。各地の多様な現象を解明するのが困難であればこそ、東京中心の語りがそれらを代替してきたのであろう。

次のような問題もある。歴史学者の成田(2016)は、歴史教科書に見られる単純化された高度経済成長期の表象を相対化するための方策として『『集団就職者にとって』の高度経済成長』に目を向けることを一例として挙げている。集団就職者とは、輝かしい経済成長を支えながらも厳しい社会状況に置かれていた人々だということであろう。では、小川・高沢編(1967)の次の言葉はどうか。「集団就職者は転職が著しく多く、非行化しやすく、現に非行少年の大半は集団就職者であるという集団就職『非行』論、あるいは転職『非行』論が、ジャーナリスティックにとりあげられている。……たぶんに偏見と速断が作用しているのではないか」⁽¹⁾。もちろん多くの集団就職者が厳しい状

況に置かれていた可能性は否定できないが、集団就職をめぐる表象が「偏見と速断」に影響されてきた可能性もある。なお、自らも集団就職を経験したという川畑（2019）によれば、転職には障壁があり、それを乗り越えるには「つて」が必要であった。このように障壁やつてを考慮した上での転職は無謀な行為とは言えないし、それがつねに非行に直結したとも考えにくい。

本稿ではこれらの諸点に留意しつつ、「陶都」と呼ばれた愛知県瀬戸市への集団就職の展開を見て行きたい。瀬戸市では「社会教育上問題となつて居た陶都瀬戸市の就業児童問題」⁽²⁾が取り沙汰された戦前から若年労働者が用いられていた。他方で1942年の例では、「戦時体制下の集団就職」の一環として同市の少年産業戦士300名が名古屋市の企業に就職している⁽³⁾。瀬戸市は労働力需要地であり、同時に、近接する名古屋市などへの供給地でもあったため、複雑な労働市場に置かれてきたという側面を持つ。栗原（1964）によれば、同市の労働者はもともと地元出身者が多かったものの、洋食器、電磁器、ノベルティ関連企業を中心に1950年代半ばから県外の若年労働者への求人が増加した。しかしその充足率は低いレベルにとどまり、中高年齢層や婦人層への依存傾向が強いとされた。東京都に次ぐ労働力需要地であった愛知県下の競合的な労働市場に置かれていたためか、後述するように若年労働者の離転職も珍しくなかった。

同市における集団就職に関しては、愛知製陶所で働いた九州出身者について十名（2008）が触れている。しかし瀬戸市への集団就職「の顕彰はほとんどなされていません」（中村，2014）とされており、そもそもこの現象については未解明の部分が多かった。2014年には『中日新聞』なごや東版で「陶都への集団就職」という8回の連載が生まれ、当時の状況が多面的に記された。澤宮（2017）は同市に就職した鹿児島県出身者の話をまとめ、中村（2019）はノベルティ企業における集団赴任や作業工程、寮生活、余暇活動に至る当時の情景を描き出している。もっとも、集団就職の制度面などについてより広範な視点から確認する必要がなおもある。この当時には「瀬戸へ行かんでどこへ行く」⁽⁴⁾と言われ、多くの人々が移動してきたことは知られていても、移動後

の状況、たとえば離転職の実態については解明されていない。

以下、第Ⅱ章では瀬戸市への集団就職の制度化の概要を、第Ⅲ章では労働や余暇活動、賃金といった集団就職者の待遇や経験を、第Ⅳ章では離転職や引抜きをめぐる状況を確認する。各種の行政資料や企業の内部資料、愛知県陶磁器工業協同組合（以下、愛陶工組合）の機関誌『愛陶工時報』、『新愛知タイムズ』などの新聞記事のほか、企業関係者や九州出身者 A・B 氏⁽⁵⁾からの聞き取り調査結果を利用する。以下で「瀬戸市」ではなく「瀬戸」と記す場合には瀬戸職安管区を意味し、そこには旧旭町（現尾張旭市）が含まれる。

Ⅱ 瀬戸市への集団就職

(1) 縁故就職と集団就職

瀬戸市の陶磁器企業ではしばしば創業者自身が他所出身者であった。同市のノベルティ企業の代表とされる丸山陶器では、創業者の山城柳平氏は山梨県出身であり、同社の下請けをおこなった「親方」などには石川県出身者も多かった（十名、2008）。

ノベルティ大手の池田丸ヨの例では、創業者の池田與作氏は石川県出身で、まずは九谷焼の絵付け師となり、名古屋に出郷してノリタケの絵付け師となった⁽⁶⁾。この時期に富山県出身の夫人と結婚し、後に丸山陶器などの助力を得ながら池田丸ヨを設立した。ノリタケ時代にも石川県・富山県の親族などが夫妻を頼って名古屋に移住し、池田丸ヨでも同郷者を雇用了。後に熊本県や鹿児島県からの集団就職者が新たに採用されるようになると従業員は最大で 150 人ほどになった。

やはりノベルティ企業であった博雲陶器に関しては、丸山陶器の原型師であった白玉博雲氏は長崎県出身であった⁽⁷⁾。博雲陶器は息子によって創業され、白玉氏も同社に参画した。同氏は「私は九州出身だから九州の人を」と言っていたとされ、集団就職者には長崎県出身者が多く、鹿児島県出身者もいた。

集団就職を含め、従業員の募集地は以前から縁故のある土地が継承されるこ

とがあり、他方で新規開拓の場合には職業安定所など公的機関も利用される(山口, 2016)。博雲陶器と鹿児島県の関係についても、九州という地縁的な要素で語られつつ、主には集団就職の制度化の中で新規開拓されたものであらうと思われる。

集団就職に関して、ここで鹿児島県出身の A 氏、宮崎県出身の B 氏の就職と赴任に触れておく(資料 1)。A 氏は国分職安管区を対象とした、1954 年における丸利商会の「集団就職 1 期生」であった⁽⁸⁾。B 氏は中学校を卒業してから 1 年後、つまり過年度の縁故就職者であったが、ここでは広義の集団就職者とする。A 氏は家庭の事情によって、B 氏は「憧れ」によって就職しており、動機をめぐる差異が見受けられる。B 氏自身は狭義の集団就職者ではなかったが、川藤電陶では募集地が定められており、B 氏はそうした移動流の一部と見ることができる。紡績業で求められた「体力」が陶磁器産業では不要であり、それが瀬戸市に向かう一因になったという A 氏の話も興味深い。

(2) 瀬戸市における集団就職の制度化

戦後の愛知県において、集団就職と呼べる現象はおそらく 1951 年 3 月卒業者を対象に始まる(山口, 2016)。同年度には鹿児島県の鹿屋職安の関係者が愛知県で求人開拓をおこなっており、長野県から愛知県に向けて全国で戦後初となる専用臨時就職列車も運行された。翌 52 年の春にはフランスやイギリスなどによる綿製品の輸入制限を受け、紡績業界が操短を実施するとともに新規採用を減らしている(山口, 2018)。愛知県下でも「糸ヘン景気の没落」が語られたが、他方では「一般商店からの小口申込みの殺到が目につく」とされ、鹿児島県から青森県に至る各所で愛知県職員が求職開拓をおこなった⁽⁹⁾。

瀬戸市についてはどうか。瀬戸公共職業安定所(1961)は 1952 年の動きを記している。

昭和 24、25 年及び 27、28 年の不況時代に於ても求人数は求職者数の 2 倍もあり、到底管内中学校卒業者のみでは……満身に充足することかなわ

ず、……昭和 27 年に初めて、118 名の求人連絡を県外の安定所に発し 68 名を受け入れた。県外からの就労は極めて良く、その後各事業所がこれにならって県外労務者を歓迎し、毎年他県安定所への求人連絡数は増加の一途を辿り、県外労務者の受け入れは瀬戸地方の産業発展に大きく貢献した。

陶土や木材があれば陶磁器は生産可能であり、近隣で原料が得られた同市では終戦直後から輸出目的での生産が進められた。燃料の石炭や絵付けで使用する金に関しても国の関与によって最優先で確保できたという⁽¹⁰⁾。輸出拡大にもなう 1940 年代後半からの求人難を受け、1952 年には県レベルでの動きにあわせて瀬戸からも県外への求人連絡がなされるようになったのであろう。

翌 53 年には瀬戸市の企業による九州での現地選考が初めておこなわれた。「陶都が初の県外求人を行う『土姫』募集の選考試験はこの程九州地方に職安関係者と事業場代表らが訪れて実施され、……『初の募集としては大成功だったと云えよう』」⁽¹¹⁾。なお、「鹿児島県は地元産業に乏しいため県当局は元より応募者も積極的な就職意欲を持つていて理解されやすい」⁽¹²⁾、「最初のころは他に就職先がなく、鹿児島から『オール 5』の優秀な子ばかりが来た」⁽¹³⁾との話は、この時期の供給地側に強力なプッシュ要因があったことを示している。

瀬戸市への集団赴任に関してはまとまった資料がない。1955 年 3 月卒業生の赴任計画を例に挙げると⁽¹⁴⁾、まずは 3 月 25 日に「長野班」女子 30 名が国鉄大曾根駅に到着して 1 社に、28 日には「鹿児島班」男女 180 名が名古屋駅に到着して 7 社に⁽¹⁵⁾、4 月 1 日には「新潟班」男女 50 名が大曾根駅に到着して 2 社に入社する。4 月上旬には「秋田班」女子 30 名が 1 社に入社予定とされた。

このような中、瀬戸職安の「職員は一丸となって東奔西走、求職開拓に努め、或は寮、寄宿舎の新増築、労務管理の向上、賃金の増額、高校卒への切り替えにと種々事業主及び各種団体の相談相手となり、又指導して万全な充足対策に力を傾けて来た」(瀬戸公共職業安定所、1961)。これに呼応して各企業

は従業員寮を整備した。1956年には地元紙『新愛知タイムズ』に「異郷の宿」という連載記事が掲載され、その初回には「現在大小さまざま三十二事業場が寮を持ち、お国なまりもそのままに、煙と共に集団生活を送っている」⁽¹⁶⁾とある。

(3) 従業員寮の整備

図1は瀬戸市中心部における各企業の工場と従業員寮の位置関係を示している。同市の中心はかつては図の右方一帯であり、陶磁器は周囲の傾斜地を利用した登り窯で生産された。しかし自然地形に左右されない石炭窯などへの転換、名鉄瀬戸線（開業当時は瀬戸自動鉄道）の開通などによる交通利便性、平地でのより広い敷地の確保といった諸要因によって企業は西方へ展開していく。寮は多くの場合には事業所・工場の敷地内や近隣に置かれたが、工場と寮の間が直線距離で1km程度も離れているケースも見受けられた。

A氏によれば丸利商会には1954年時点で木造の寮が1つあり、後に2階建



図1 瀬戸市中心部における各企業の工場と従業員寮（1960年頃）

注：A：瀬戸映画館（瀬戸シネマ），B：朝日（映画）劇場，C：千代田東映（劇場），D：深川館，E：（瀬戸）中央館，F：瀬戸大映（劇場）。X：愛知県陶磁器工業組合，Y：瀬戸窯業高校，Z：瀬戸市民会館（現瀬戸蔵ミュージアム）。原図および陰影起伏図は2020年現在の地理院地図を用いた。工場・寮の位置についてはいささか不明確なものもある。

資料：聞き取り調査，中部善隣出版編（1963）『瀬戸市付旭町住宅地図』（武藤忠司氏の確認）。

での赤い屋根の大きな女子寮ができた⁽¹⁷⁾。2つの寮は工場に隣接していた。宮崎製陶でも九州からの集団就職者を迎えるために「寄宿舎としては最高」という寮を工場の隣接地に建設した⁽¹⁸⁾。それは「タイル張りの浴場、防火水槽を備え、三名の寮母、総責任者を置く。総建坪百十坪二階建の立派なもの」であったという。

丸利商店⁽¹⁹⁾の工場と寮は離れていた⁽²⁰⁾。この寮の場所には1890年代に同社の前身となる事業所が置かれ、その後も家屋が残されていた。1925年における丸利商店としての事業開始時には図中の工場付近に拠点を移した。そして1960年に沖縄出身の集団就職者を雇用した際には、以前から所有していた家屋を寮として用いている。同社の集団就職者は男子のみであった。

池田丸ヨでも工場と寮が離れていた⁽²¹⁾。これは不動産投資の一環として購入された土地を寮に利用した結果であった。この寮は男女共用であった。

博雲陶器では新規学卒者向けの県外求人をも1957年3月卒業者に対して初めて実施し、その「さきがけとして約十名の男子を寄宿させる、現在新社屋二階を寮にしているが漸次拡張して本腰を入れる」⁽²²⁾。この男子寮は工場の敷地内にあったが、その後新設された女子寮は「男女は一緒ではない方が良い」との考えによって離れた場所に置かれた⁽²³⁾。

先に見た丸利商店の沖縄出身者のように各企業ごとに主要な募集地が定まっていた。丸利商会・光和陶器・加藤政谷商店・丸二産業・TK玩具・幡山製陶では鹿児島県、平八園・瀬戸輸出原料では熊本県、川藤電陶では宮崎県、瀬栄合資菱野工場では長野県、山久製陶では新潟県、久田製陶・山壽陶器では秋田県といったように各企業には同郷者が集まることもあったのである⁽²⁴⁾。

(4) 新規学卒者の指導と求職開拓への取り組み

瀬戸職安は新規学卒者向けの補導やイベントもおこなった。たとえば「昭和31年から新規就職者を一堂に集め、映画、舞踊、歌謡曲、奇術等と盛り沢山の催し物で楽しく補導激励会を開催し、或は瀬戸県外労務協議会主催の就職者慰安運動会に楽しい一日を過している」(瀬戸公共職業安定所、1961)。補導

表 1 新規就職者補導激励会（1956～60年）

年	月	日	会場	人数
1956			深川館（映画館，D）	1,200
1957	5	27	朝日映劇（映画館，B）	1,300
1958	5	25	旭公民館	1,500
1959			旭公民館	1,500
1960	4	29	瀬戸市民会館（Z）	2,000

注：空欄はデータなし。旭公民館は旧旭町（現尾張旭市）の施設である。表中のアルファベットは図 1 に対応する。

資料：瀬戸公共職業安定所（1961）。

表 2 新規学校卒業生補導実施状況（1960年3月卒業生）

月	集団補導				個別補導			
	対象事業所数	対象者数（人）			補導回数	対象者数（人）		
		県外	県内	計		県外	県内	計
4					21	20		20
5	5	124	36	160	27	24	1	25
6	79	1112	152	1264	17	14	3	17
7	1	19	9	28				
計	85	1255	197	1452	65	58	4	62

資料：瀬戸公共職業安定所（1961）。

激励会は映画館や市民会館で実施された（表 1）。中村（2019）は 1966 年に瀬戸市民会館で開催された「新規就職者の集い」に触れている。同種の会合は少なくとも 1979 年の「新規学卒就職者激励大会」までは確認できる⁽²⁵⁾。

さらに個別的な補導もなされている。表 2 は 1960 年 3 月の新規学卒者を対象とした補導実施状況を示している。こうした事業は求人（求職開拓）の際の PR 材料という意味を持ったはずである（山口，2016）。

集団就職者を対象とした福祉事業には各組合も参与した。たとえば愛陶工組合は年少労働者福祉員制度に参加し、同組合からは 1963 年時点で 55 名の関係者が福祉員を委嘱されている⁽²⁶⁾。この 63 年には「瀬戸陶磁器事業協同組

合共同給食場」の設置にも取り組んだ。前年に国が定めた雇用促進融資制度を受け、瀬戸商工会議所、愛陶工組合、瀬戸輸出陶磁器完成工業組合がこの計画を進めた⁽²⁷⁾。共同給食には傘下企業で生じた集団食中毒に対する解決策という目的もあったが、求人難対策という意味も込められた。「経済成長の拡大にともなつて、労働力不足の問題はいよいよ深刻化し、そのしわよせは中小企業に寄せられ一層激化の一途を辿りつつあり、これが労務充足の第一の対策として打出されたのが共同給食事業であります」⁽²⁸⁾。この種の施設は愛知県の尾西織物業地域において早くも1918年に設立されており（湯澤，2018）、瀬戸市の事例は先駆的なものとは言えないが、他所との競合のためにも必要とされたのであろう。

このように瀬戸市では求人難に対して町ぐるみの対応が図られた。では、それは功を奏したのであろうか。

(5) 新規学卒就職者数の推移と出身県別人数

図2は、1952年以降の愛知県外から瀬戸職安管内への新規中卒就職者数を

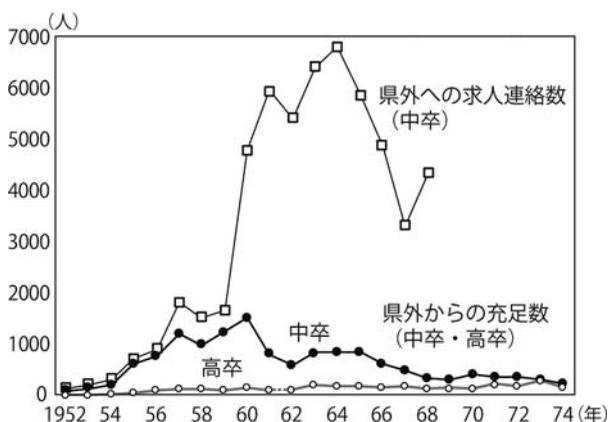


図2 瀬戸職安管区における愛知県外への求人連絡数（新規中卒者）と県外からの充足数（中卒・高卒）

注：1961年以前の「高卒」充足数には県内出身者も含まれる。
資料：瀬戸公共職業安定所（1961）、愛知県労働部職業安定課編『職業安定年報』各年分。

示している。県外への求人連絡数は1964年の6,798名まで上昇したのに対し、県外からの充足数は1960年の1,502名をピークに減少に転じている。こうした場合には一般に新規高卒者の雇用が試みられる。瀬戸職安では早くも1955年に高卒者への求人の取り組みを始めていた⁽²⁹⁾。しかし高卒就職者数は一貫して低い値となっている。なお、地元の中卒者については、1956年に開催された「中学校新卒者の求職不足打開協議会」において「地元新卒労務者は都市へ流れ」ている、「陶磁器を嫌うのは……子供心に不安であり、親も嫌うと云う感がある」といった発言が見受けられる⁽³⁰⁾。地元の新規中卒者を確保することも容易ではなかったのである。図3は瀬戸市における1960年以降の窯業・土石製品製造業従事者数および製造品出荷額等の推移を示している。出荷額が伸長していた一方で、従事者は減少していたのであった。

ここで瀬戸に就職した新規中卒者の出身県別就職者数も見ておきたい。おそらく1950年代初頭には鹿児島県が最多であり、1956年の採用予定でも「鹿児島三百名、熊本百六十五名、岐阜五十名、新潟九十八名、長野四十名、秋田

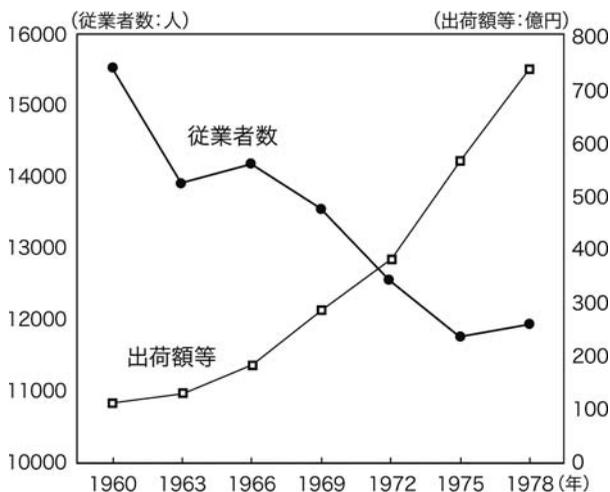


図3 瀬戸市における窯業・土石製品製造業の従事者数と製造品出荷額等
注：4人以上の事業所の数値を示す。

資料：『工業統計調査』各年分。

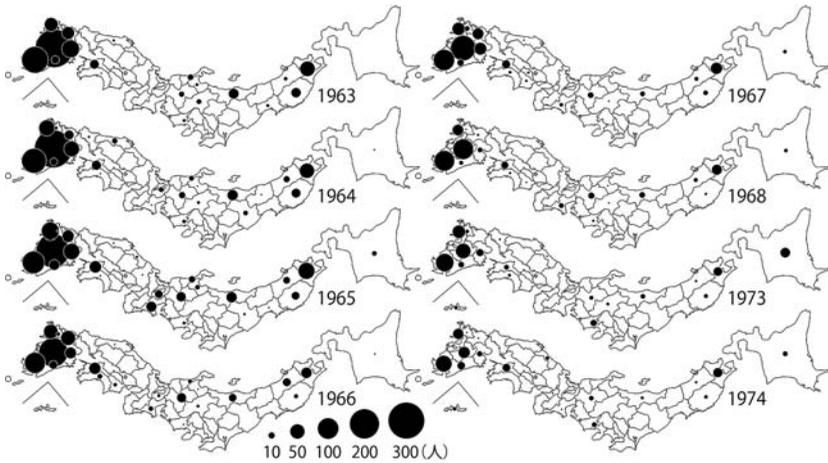


図4 瀬戸職安管区における新規中卒就職者の出身県別人数（各年3月卒業者）
資料：愛知県労働部職業安定課編『職業安定年報』各年分。

二十名で九十％は女性で占めている」⁽³¹⁾。1960年代以降に関する図4を見ると熊本県が最多となり、鹿児島県、大分県の順となっている。九州だけでなく青森県を中心とした東北出身者も少なくない。他方で中部出身者は少なかった。

以上のように瀬戸市では、1950年頃には求人難が生じており、県外の新規学卒者に対する求人への取り組みが進められ、多数の従業員寮も整備された。しかし1960年には新規学卒者について次のように言われている。「一般的な傾向では、安定性と待遇面のよい事業場を望んでおり、雇用条件の格差は就職戦線に大きな影響を与えている現状で……考えられることは瀬戸地区の窯業関係え [ママ] の就職希望がきわめて少ないことである」⁽³²⁾。この時期には離転職や引抜きも問題化していく。次章では雇用条件の一端を知るために集団就職者の労働や余暇活動、賃金について触れてみたい。

Ⅲ 集団就職者の待遇とその変化

(1) 労働と余暇活動

丸利商会の A 氏、川藤電陶の B 氏の勤務時間はいずれも 8 時から 17 時までの 9 時間であり、残業も珍しくなかった（資料 2）。両者ともに薬品の臭いなどで労働環境の悪さを感じていた。寮の食事⁽³³⁾については A 氏が言うように食費を月額で支払う必要があった。A 氏は実家に仕送りし、B 氏は反対に実家から仕送りしてもらったことがあると答えており、両者の経験には相違もある。月 2 回の休日には末広町・銀座通り（朝日町）商店街や宮前界隈に向き、映画館に行くこともあった（図 1）。

博雲陶器もまた 8 時始業であり、残業が普通であった（資料 3）。1 日 3 食の食事内容は当時としては悪くなかったという。夜食代は各自が支払った。寮には娯楽室はなく、そもそも多忙であったため遊んでいる余裕はなかった。

1950 年代末頃における池田丸ヨには数百人の従業員がおり、夜食も含めて 1 日 4 食が用意された（資料 4）。

資料 2～4 でも言及されているように、1950 年代の瀬戸市では、基本的に毎月 1 日と 16 日が休日とされていた⁽³⁴⁾。この旧慣は 1960 年代初頭に変化していく。1960 年に集団就職者を初めて迎えた丸利商店では、この時期に毎週日曜日を休日とするようになった⁽³⁵⁾。ただし出来高払いや日給制・日給月給制などの賃金体系を採っていた企業では、特に年齢の高い従業員を中心に休日の増加に対する反発もあったという⁽³⁶⁾。各企業では休日の扱いに相違が生まれていたのである。

1963 年には年少労働者福祉員の活動例として「一斉休業や定時終業などをすすめて余暇をつくり」、教育やレクリエーションに役立てるよう勧告することが挙げられている⁽³⁷⁾。ところが翌 64 年には「輸出食器及び玩具〔企業〕の時間外及び休日労働の増加が目立っており、特に女子及び年少労働者の残業もみられる」⁽³⁸⁾とされ、愛陶工組合はその改善を求めている。おそらくこの時

期には休日労働の事例が増えた一方で、従業員への福利厚生増進や求職開拓での PR の意味を込めて休日を増やす必要があったものと思われる。

もっとも、就職者にとって楽しみが休日だけであった訳ではない。慰安旅行を意味する「山行き」は各社でおこなわれた。丸山陶器の例では、会社の費用負担で春先に温泉で 1 泊していた（十名，2008）。資料 2・4 によれば、山行きでは静岡県や栃木県にまで足を伸ばしている。当時の瀬戸市では各社の山行きをめぐる話題で 1 カ月ほど持ちきりであったという⁽³⁹⁾。

『新愛知タイムズ』の連載記事「異郷の宿」には各寮における日常生活の一端が描かれている。たとえば光和陶器光和寮（250 人）には「お茶、華道、洋裁と徹底した修養を学校の校友会活動のように設けてある」⁽⁴⁰⁾。こうした華道や茶道などの取り組みは各社でおこなわれていたようである。丸利商会南山寮（126 人）については「大きな食堂でテレビを眺めながら夕食の一ときを送る。バレーボールがお得意で職域対抗では上位を占めるというのが自慢！ 毎日来る手紙が平均八十通」⁽⁴¹⁾、平八園（16 人）では「夜のひとときは誰きがねなく熊本弁をしゃべり、好きな踊りを踊り」⁽⁴²⁾、丸二製陶（76 人）では「広いバレーコートで休日は存分にスポーツを満喫するぐらいで、夜はもっぱらレコードをかけたり『平凡』を読んだり」⁽⁴³⁾とある。

(2) 賃金をめぐる動き

A 氏・B 氏によれば賃金は高くなかったというが（資料 2）、1955 年に鹿児島県で採用試験を実施した丸二輸出玩具産業は次のように言っている。

当社の求人は女二十五名 [、] 男四名であつたのに対して求職は女九十八名、男十名が殺到して、厳選を極めた [。鹿児島県] 國府では繊維業界よりも瀬戸に好評を寄せ、希望者は圧倒的に多い。作業内容、賃金、宿舍などで繊維よりも良いと云う⁽⁴⁴⁾。

つまり 55 年の時点では、瀬戸市の陶磁器企業は他所の紡績企業よりも賃金な

どの点で良好だと見なされていたのであった。同年には集団就職者の初任給に関する記事もある。

彼女達の初任給は何れも会社に於て協定され、一ヶ月三千九百円－四千元（うち食事千六百五十円を差引く）で、瀬戸市内の採用者の初任給である一人約五千元より約千円安いが、これは事業主側にとって見ると「完備した宿舍や諸施設にかけた経費」からすると未だ問題でないと云う⁽⁴⁵⁾。

この文章によれば各社の初任給は同程度に設定されており、A氏も言うように賃金から食費が差し引かれていた。集団就職者は地元出身者とは異なる賃金体系となっており⁽⁴⁶⁾、その差額は「宿舍や諸施設の経費」として「未だ問題でない」とされている。

翌56年になると、初任給は「月間約四千五百円（休日出勤無し）で、食事費は千五～六百円程度」⁽⁴⁷⁾というように前年より月額500円ほど上昇し、食費は少し減額されている。しかし同じ記事によれば「求職者側職安では最近各地からの求人に比べて陶磁器業界は比較的低賃金であるので初任給を少くとも〔日給〕二百円程度に〔ママ〕ほしいと瀬戸に要請して来」たという。この年における愛知県での平均日給は機械195円、繊維195円、店員180円に対して「陶工一七〇－一八〇円でやや低い程」とされている⁽⁴⁸⁾。経済成長の進展によって賃金をめぐる動きは年々変化しており、特に繊維業界に逆転されたことがただちに問題となっていく。

この時期の瀬戸市には賃金に関する問題がいま1つあった。それは「尾西、一宮地方の紡績関係工場」と比較したとき、雇用年数に比して賃金が増加していなかったことである。「瀬戸の場合初任給百五十～七十円で第一陣として来た女工は三年余にもなるが三百円を上廻るのは少い」⁽⁴⁹⁾。

1959年には最低賃金法が定められ、最低賃金の決定範囲が主に行政区画に置かれるようになる（山口，2016）。最低賃金は新規中卒者の初任給に相当するとされ、多くの集団就職者は移動先を判断する材料の1つとしたはずであ

る。翌60年には「最低賃金の確立」⁽⁵⁰⁾がうたわれ、愛陶工組合では傘下企業の賃金の実態調査を実施した⁽⁵¹⁾。この時には「最近は岐阜県を始め他地域の陶磁器業界においても、この制度を確立するための実態調査が進められており、すでに調査を終えたところもある現状」⁽⁵²⁾だとされている。61年9月には、同組合と瀬戸輸出陶磁器完成工業組合によって「満十五才以上（一日所定労働時間八時間以内）二八〇円、住込労働者に対する食費（一日三食）の徴収額を月額三、〇〇〇円を超えない」という「最低賃金業者間協定」を愛知労働基準局に申請した。

なお、最低賃金をめぐる1965年の労使間での協議では、労働者側から「生活を無視した最低賃金の決定はいけないと思うし来年の新規学卒者の求人にも大きく影響すると思われる」、「瀬戸地区は多治見地方のように組織的に強いところがなく、値上げ面でも常に他産地の陶業界に引きずられているような傾向で団結に乏しい」との意見が出されている⁽⁵³⁾。最低賃金は他所との比較において集団就職に影響すると考えられていたのである。

こうした状況にあった瀬戸市において、集団就職者の離転職や引抜きはいかなるものであったのだろうか。

IV 集団就職者の離転職と引抜き

(1) 離職と再就職の経験

資料5によればA氏・B氏はそれぞれの理由によって離職し、瀬戸市を離れた。しかしA氏は丸利商会に勤めていた妹を頼りに再び瀬戸市に戻り、愛龍社に就職した。初職先の丸利商会の賃金が鹿児島市のラーメン屋のそれより高かったことも瀬戸市での再就職を考える一因となった。B氏は故郷の宮崎県に戻ったものの、同郷の友人をつつとして愛知県常滑市に再移住し、瀬戸市の川藤電陶に勤務していた友人のところへ遊びに行った際に同社への再就職を求められ、それに応じた。

A氏には家族が、B氏には同郷の友人が転職移動のつととなった。B氏は、

賃金の多寡によって転職を考えることはあっても「転職する勇気がなかった」(資料2)。ところが、つてがある場合には特に問題なく転職しており、B氏の友人までもが川藤電陶へ転職している。両者の経験では、転職に際しては賃金の多寡だけでなく、つてが重要であった。それは他の人々にとっても同様だったようである。

(2) 一宮の紡績企業との関係

瀬戸市の陶磁器企業にとって1956年は買い手市場から売り手市場への転換が意識され、同じ愛知県下の紡績企業に初任給を逆転された年であった。瀬戸市から一宮市界隈の紡績企業へ転職した女性労働者に関する同年の新聞記事がある。

女工の移動する原因は第一に給料の安いことがあげられており尾西、一宮地方の紡績関係工場と比較してみると瀬戸の場合初任給百五十～七十円で……一ヶ月分の食費は千七百円前後となっており、紡績では初任給が二百円、食費千二百円前後と窯業界と相当なひらきをもっている。

地元労働者は二年も勤めればすでに一人前として通るのが多く、宿舍女工としても同年輩であり乍ら差別待遇とは心外だとの声もあり先月某宿舍では全員がトランクなどを持って転職するといった騒ぎまであったが事業主の説得で収まった。又某事業場では宿舍の風呂の燃料代、電気代も天引するといったこともあって女工達は血も涙もない事業主だと監督官に訴えた……。

女工達が紡績に走る手ず「ママ」るは同郷からの友達兄弟が来ているのが至「ママ」原因となっており、これが何等の形で阻止される場合には第二の女工哀史が画かれるかも知れない⁽⁵⁴⁾。

この文章では「尾西、一宮地方」の紡績企業との賃金格差とともに「同郷からの友達兄弟が来ている」ことが転職移動の原因になっているとする。この記事

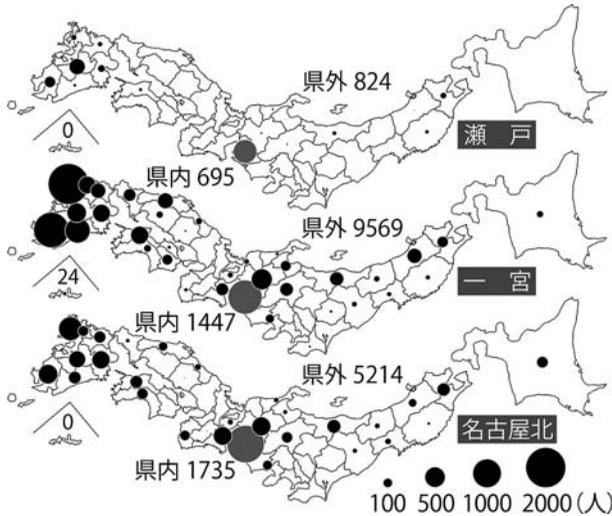


図5 瀬戸・一宮・名古屋北職安管区における新規中卒就職者の出身県別人数
(1963年3月卒業生)

資料：愛知県労働部職業安定課編『職業安定年報』，昭和38年版。

には「女工の紡績移動については二、三の事例がある」とも記されている。

一宮市境界の紡績企業は、実際に多くのつてを提供した可能性がある。図5は、1963年における瀬戸・一宮・名古屋北職安管内への出身都道府県別の新規中卒就職者数を示している⁽⁵⁵⁾。瀬戸への就職者は県内外合わせて1,519人であったのに対し、職安管区としては愛知県内最大の労働力需要地であった一宮は11,016人となっている。瀬戸に隣接する名古屋北は6,949人であり、県内出身者は一宮よりも多かった。一宮・名古屋北では中部出身者も少なくない。瀬戸は一宮・名古屋北と比して県内外のいずれからも集団就職者を確保できていなかったのである。そして、他所における同郷者の集中は、瀬戸市の就職者に少なからぬ影響を与えた可能性がある。

こうした競合先に対しては、まずは賃金で上回る必要があった。表3は1965年3月卒業の新規中卒者に関する尾張地区・名古屋地区での職種別初任給を示している。同表では、瀬戸を含む尾張地区の「窯業・土石」の女子は、一宮を含む同地区の「繊維工業」の女子よりも初任給が高く、同表全体でも最

表3 愛知県尾張地区・名古屋地区における新規中卒者の業種別初任給
(1965年3月卒業者)

業種	女子		男子	
	尾張	名古屋	尾張	名古屋
窯業・土石	13,370	12,770	13,030	13,210
繊維工業	13,050	13,130	13,200	13,170
金属・機械	12,760	12,880	13,010	13,180
電気機械	12,250	12,560	12,080	13,000
サービス	12,270	11,660	12,270	12,310

注：単位：円。表中の「尾張」地区には瀬戸・半田・一宮・津島・犬山・春日井、「名古屋」地区には名古屋中・北・南の各職安管区が含まれる。業種は抜粋。
資料：愛知県労働部職業安定課（1964）『昭和39年と40年新規学校卒業者の動きと初任給』。

高値となっている。この時期の陶磁器企業は特に若年女性労働者の確保を重視していたのであろう。

一宮などの大手紡績企業が企業内学校を整備するなど福利厚生に力を入れるようになると⁽⁵⁶⁾、中小企業中心の瀬戸市では労務管理の在り方がさらに問われるようになる。以下は1960年の文章である。

中小企業の経営者は物や金では到底大企業に対抗は望めない、唯一つ対抗出来るのは……経営者の愛情であると思う。この愛情で大切なことは、まず古い封建制度を捨てて民主的な制度をとり入れることである。次に旧式な家族制度（家父長制）を工場に入れないこと。身分の差別、下の者の権利を認めない制度等の排除であります。第三には個人の尊厳、両性の平等による新しい家族協同体を工場に入れることであります⁽⁵⁷⁾。

瀬戸市ではしばしば出身地を理由とした差別的な待遇がなされていた。大手企業に対抗するには「経営者の愛情」が重要だとされており、しかもそれは旧慣を排する方向での愛情だとされている。言い換えれば、旧慣がなおも残り続けていたということであろう。

(3) 沖縄出身者の集団就職と離職

ここで沖縄出身者の例を見てみよう。1957年から開始された沖縄から本土への集団就職に対し、愛知県は翌58年から求人連絡や求職開拓に乗り出している(山口, 2016)。瀬戸職安では「[昭和]34年度に初めて沖縄へ286名の求人連絡をなし34名を受け入れ、引き続き35年度も492名の求人連絡をして18名受入れた」(瀬戸公共職業安定所, 1961)。特に1960年3月卒業生に関しては、愛知県から沖縄への求人連絡308件のうち瀬戸286、犬山15、半田7というように瀬戸からの求人が全体の9割以上を占めていた⁽⁵⁸⁾。

丸利商店は沖縄からの集団就職者を雇用した⁽⁵⁹⁾。同社ではかつて他社よりも賃金を高く設定することで地元出身者だけを雇用していた。三重県南部から雇用するという話が出たこともあったが、その時は上手く行かなかった。瀬戸職安が沖縄への求人連絡に乗り出した1959年度には同社からも求人を出した。これが同社で初めての集団就職への取り組みとなり、沖縄本島中頭郡と宮古島の出身者を1960年に10名、61年に3名を採用した(表4)。先述の通り工場からやや離れた場所にあった家屋を寮として利用した(図1)。朝夕の食事は寮でとり、昼食は寮母が作って工場へ持たせていた。また、愛知県蒲郡方面で山行きを実施し、野球チームを作り、卓球台やバレーボールのネットを設置した。この時期には毎週日曜日が休日となっており、休日を利用して他社チームと試合することもあった。

同社では福利厚生の上昇に努めたものの、沖縄出身者は定着しなかった。表4のF氏については自衛隊に入隊するという目的があって退職したが、その他の多くの者は退職理由も行方も分からない。もっとも長く勤務したF氏でも3年強であり、理由は不明だが半年で退職・解雇という者もいる。同社ではこれ以降には地方からの集団就職者を雇用せず、地元中学校の新卒者や、地元や近郊の比較的若い男女従業員を雇うようにしたという。

同社において沖縄出身者が早期に退職していった理由は不明である。ただし1つ想起されるのは、この時期に喧伝されていた他社による引抜きの可能性である。

表4 丸利商店で雇用された沖縄出身者

	出身地住所	雇入	退職・解雇	
A	中頭郡宜野湾村	1960年4月	1960年10月	解雇
B			1960年10月	解雇
C			1960年10月	退職
D			1961年4月	退職
E			1962年4月	退職
F			1963年5月	退職
G	中頭郡北谷村		1963年4月	退職
H	中頭郡具志川村		1961年8月	退職
I	宮古郡下地町		1961年6月	退職
J			1963年1月	退職
K	宮古郡下地町	1961年5月	1963年2月	退職
L			1963年5月	退職
M			1963年5月	退職

資料：丸利商店の内部資料。

(4) 引抜きという問題

瀬戸市では、売り手市場への転換が意識された1956年の段階で「地元同志での女工の引抜きの憂い」⁽⁶⁰⁾があるとされた。そして1960年の『愛陶工時報』では、引抜きに関する記事が数回にわたって掲載されている。たとえば「業界の好況にともなう雇用不足は深刻で、工具充足に困つたあげく……従業員の引抜き問題がはげしくなり、業界に大きな波紋をなげかけている」⁽⁶¹⁾。そこで「他工場の従業員の引抜き等の行為は一切やらないことを申し合わせ」⁽⁶²⁾たものの、「あいかわらずこうした問題の発生を聞く」⁽⁶³⁾。愛陶工組合の「要望事項」では、問題発生時には「安定所に必ず連絡すること」といった文言が見受けられる。また、引抜きによる転職が生じる要因としては「(1) 現在働いているところより賃金ベースがよくなる、(2) 工場の設備環境の善悪、(3) 交通の便利等でこの場合(1)が殆んどであるように考へられるが、年齢の若い従業員は案外(2)に該当する」⁽⁶⁴⁾とされている。若年労働者は賃金だけでなく労働環境や福利厚生についても重視すると考えられていたのである。

図1には限られた数の企業しか示していないものの、それでも瀬戸市内では同業他社が近接して立地していたことが理解される。企業主は、こうした相互の近接性の中で、従業員の同郷者ネットワークを含む様々な手段や機会を用いて引抜きをおこなったのかもしれない。B氏による川藤電陶への2度目の就職もそうしたケースに近いものであろう。

愛陶工組合による傘下企業の従業員13,000人の動向調査によれば⁽⁶⁵⁾、1960年9月から62年9月までの2年間における就職者は11,106人、離職者は12,082人であり、「年間を通じ常に四十四パーセントの従業員が浮動して」とされた。また1963年1月時点から見て「最近一ケ年に年少従業員が千人以上も陶業を離れ他産業に移行し」た。瀬戸市の集団就職者は非常に流動的だったのである。

転職や引抜きは、各企業からすれば大きな問題だったはずである。他方で集団就職者自身にとっては、つてや引抜き先の企業がある場合に転職したとすれば、それらは直ちに非行に結びつくものではなかったとも言えよう。

(5) 集団就職者から多様な労働者への転換

A氏・B氏は退職後に故郷や遠隔地に移動し、その後再び瀬戸市に戻ってきた。両者ともに瀬戸市において九州出身者と結婚して定住し、A氏は結婚後も内職で引き猫の仕上げ作業をした。こうした再環流者も含め、集団就職者の安定的な確保が難しかった瀬戸市では様々な労働者が雇用されていく。

丸利商店では集団就職者から地元在住者へと雇用の対象を変更した。1962年、愛陶工組合は傘下企業に対し「人手がたりないときは炭鉱離職者、日雇労働者、中高年令求職者を雇いましょう」⁽⁶⁶⁾とうたっている。もっともこれは労働省が主導した方針であり、瀬戸市に限らず全国的に見られたものであろう。また、既婚女性の雇用も強化されていく。図6は1970年代における丸利商会の従業員募集広告であり、「パートタイマー多数」が募集されている。なお、就業時間はA氏の勤務していた1950年代と同じ8時から17時であったが、休日については「毎日曜日、祭日、夏休」とある。

図6 丸利商会の従業員募集広告（1970年代）（筆者蔵）

これら以外の雇用方法もあった。愛知県に特徴的な事業として「県外集団アルバイト」が実施され（山口，2018，瀬戸市制70周年記念誌編集委員会編，1999），冬期には若年労働者の季節労働があった⁽⁶⁷⁾。

しかしながら，人数こそ減ったものの集団就職者は1970年代まで確認できる（図2）。また，池田丸ヨの相当数の集団就職者は「中卒でやって来て，こちらで結婚して，瀬戸に根付いている」⁽⁶⁸⁾。瀬戸市には様々なかたちで出郷者が流入し，定住したのである。

V おわりに

本稿では陶都瀬戸市への集団就職の展開を確認した。同市では第二次世界大戦の終戦から間もなく輸出品の生産が再開され，1950年前後には求人難が明確に現れていた。鹿児島県などの労働力供給地からの働きかけに呼応するかたちで，また愛知県全体での動きに同調しながら，町ぐるみでの集団求人とでも

言えるような諸実践が積極的に進められた。1952年には県外への求人連絡が、翌53年には現地選考や集団赴任がおこなわれている。この時期から集団就職者を迎え入れる態勢が整えられ、各社の寮が整備されていく。わずかながらも1954年の「青森発上野行き」就職列車より早い話である。

一般に集団就職者の求人難は1960年頃に強まったと見なされていようが、瀬戸市では早くも1956年にはその傾向が現れ始めた。集団就職者数は1960年にピークを迎える。全国的に見れば県外就職した新規中卒者がもっとも多かったのは1963年である（山口、2016）。瀬戸市における様々な転機は他所よりも早く訪れることが多かったのである。

瀬戸市では、職安管区としては愛知県内最大の労働力需要地であった一宮や、陶磁器産業で知られる岐阜県多治見市などとの競合の中で、賃金や福利厚生 の在り方が強く問われていた。特に一宮市界限に関しては、瀬戸市の企業に就職した人々の同郷者が多数おり、それがつととなって転職移動に結びつくことが問題視された。また、市内の同業者間でも若年労働者の引抜きが生じていた。こうした状況において賃金や休日も変化していったのである。

本稿ではA氏・B氏の経験も見てきた。その経験には重複も差異もあったが、何よりも、両者ともに決して単線的ではない広域的な移動経験があった。個々人や各地の多様な側面を適切に描き出せて初めて、集団就職の時空間をめぐる妥当な理解に近づくことができるように思われる。

【付記】本稿の作成に際しては武藤忠司氏（瀬戸蔵ミュージアム）の全面的な協力を得るとともに、加藤勇夫氏、加藤邦彦氏、水野まち子氏とご家族の皆様、永谷和子氏、松原弘子氏、若杉スエ氏、中野昭雄氏、濱田琢司氏、そして中村儀朋氏（瀬戸ノベルティ文化保存研究会）など多くの皆様にお世話になりました。心より御礼申し上げます。なお本稿の内容は2019年人文地理学会大会（於関西大学）で発表した。

註

- (1) 以下、引用文中の〔 〕内は引用者による補足を、……は中略を意味する。
- (2) 新愛知、1936年3月21日。
- (3) 新愛知、1942年3月24日夕刊。

- (4) 中日新聞, 2014年7月11日, など。
- (5) 両氏への聞き取り調査は瀬戸蔵ミュージアムの武藤忠司氏の手配によって2017年5月17日に同館で実施した。両氏は同館のボランティアガイドであるC氏(東京都出身)の知人であり, C氏自身もまた丸利商会の従業員の家族であった。
- (6) 聞き取り調査, 瀬戸陶磁器工業協同組合61年史編集委員会編(2018)による。
- (7) 聞き取り調査による。
- (8) 新愛知タイムズ(1954年3月23日)によれば, 「愛知縣下の各職安所が行つてゐる縣外求人トップを切つて, 九州から第一陣一一五名が, きよう名駅に着き, 全員健康な体つきに笑顔をうかべて陶都入りした[。]瀬戸職安所から鹿児島縣國分職安所管内に求人した新制中学卒業業者約二〇〇名中の第一陣で, 數百里の汽車の旅を終り本二十三日午後一時四十二分, 希望の胸をふくらませながら名駅についた, 大口求人である, 光和[陶器], 丸利[商会], 丸三[松本商会]の各社からでむかえのバスが横ず[ママ]けされ, それぞれに分乗, ……瀬戸入り, 十數事業場に分散, 數日後から作業に携わることになつてゐる」。中部日本新聞(1954年3月23日)も参照。
- (9) 中部日本新聞, 1952年3月23日市民版。
- (10) 聞き取り調査による。
- (11) 新愛知タイムズ, 1953年2月11日。なお, 中日新聞(2014年7月12日なごや東版)では, この件をもって1953年が瀬戸市における集団就職の開始年だとしている。
- (12) 新愛知タイムズ, 1953年2月11日。
- (13) 中日新聞, 2014年7月12日なごや東版。
- (14) 新愛知タイムズ, 1955年3月21日。
- (15) 南日本新聞(1955年3月29日)では鹿児島班に関して記している。
- (16) 新愛知タイムズ, 1956年4月21日。
- (17) 新愛知タイムズ(1954年2月25日)には「丸利, 政谷兩商店では, 百余万円を費して目下宿舍の整備に當つてゐるが, 今月中には完工する運びである」と記されている。
- (18) 新愛知タイムズ, 1956年11月29日。
- (19) 丸利商店は丸利商会とは別会社であり, 特に陶製小物の製作を得意とした。
- (20) 聞き取り調査による。
- (21) 聞き取り調査による。
- (22) 新愛知タイムズ, 1956年11月29日。
- (23) 聞き取り調査による。
- (24) 新愛知タイムズの連載「異郷の宿」および聞き取り調査結果による。
- (25) 『愛陶工時報』第218号, 1979年4月。

- 26 『愛陶工時報』第45号, 1963年7月。
- 27 『愛陶工時報』第30号, 1962年5月。
- 28 『愛陶工時報』第30号, 1962年5月。
- 29 新愛知タイムズ, 1956年3月9日。
- 30 新愛知タイムズ, 1956年3月9日。
- 31 新愛知タイムズ, 1956年2月8日。
- 32 『愛陶工時報』第2号, 1960年2月。
- 33 中村(2019)は丸利商会での食事風景の写真などを掲載している。
- 34 聞き取り調査によれば, 大正末期ないし昭和初頭までは盆と正月だけが休日だったという。その後に関しては, 「一般の職人は一日, 一六日が休みで, 前日に半月分の賃金をもらった。このため, ツモゴと一日, 一五日と一六日はお宮(深川神社)の前の夜店などで散財し」(瀬戸市史編集委員会編, 2003)たという。
- 35 聞き取り調査による。
- 36 これに関連して, 博雲陶器の従業員について「日給月給なので残業したい」(資料3)との話が聞かれた。
- 37 『愛陶工時報』第45号, 1963年7月。
- 38 『愛陶工時報』第59号, 1964年10月。カッコ内は引用者。
- 39 聞き取り調査による。
- 40 新愛知タイムズ, 1956年4月24日。
- 41 新愛知タイムズ, 1956年4月21日。
- 42 新愛知タイムズ, 1956年4月23日。
- 43 新愛知タイムズ, 1956年5月1日。
- 44 新愛知タイムズ, 1955年1月19日。
- 45 新愛知タイムズ, 1955年3月21日。
- 46 出身地による差別に関しては次のような話もある。「地元から通う従業員は夜食でラーメンを取ってもらえたが, 女性たちには品質の落ちる二等米しか与えられない」(中日新聞, 2014年7月14日なごや東版)。
- 47 新愛知タイムズ, 1956年2月8日。
- 48 新愛知タイムズ, 1956年3月9日。
- 49 新愛知タイムズ, 1956年9月25日。
- 50 『愛陶工時報』第2号, 1960年2月。
- 51 『愛陶工時報』第4号, 1960年4月, 同第5号, 1960年5月。
- 52 『愛陶工時報』第4号, 1960年4月。
- 53 『愛陶工時報』第71号, 1965年11月。
- 54 新愛知タイムズ, 1956年9月25日。
- 55 瀬戸に関しては, この図5と図4の1963年のデータは同内容である。ただし両

図では凡例の円の大きさが異なり、図5では愛知県内出身者の情報も加えている。

- (56) たとえば一宮市における毛織物紡績大手の林紡績では1956年に企業内学校の林学園を設立し、同校は1967年に正規の定時制高校として認可されている（萬年社編，1971）。
- (57) 『愛陶工時報』第7号，1960年7月。
- (58) 愛知県労働部職業安定課（1960）『職業安定年報』における「1960年3月中学校卒業者の安定所別県外求人・求職連絡状況」による。なお、翌61年3月の「琉球への求人連絡」については職安管区単位での数値は不明である。
- (59) 聞き取り調査，瀬戸陶磁器工業協同組合61年史編集委員会編（2018）による。
- (60) 新愛知タイムズ，1956年9月25日。
- (61) 『愛陶工時報』第3号，1960年3月。なお、聞き取りによれば、博雲陶器では解雇された者はいても引抜きということはなかったという。企業によって異なる状況にあった可能性がある。
- (62) 『愛陶工時報』第2号，1960年2月。
- (63) 『愛陶工時報』第3号，1960年3月。
- (64) 『愛陶工時報』第5号，1960年5月。
- (65) 『愛陶工時報』第38号，1963年1月。原データは「健康保険組合資料」とされる。
- (66) 『愛陶工時報』第30号，1962年5月。
- (67) 中部日本新聞，1959年3月6日市民版。
- (68) 聞き取り調査による。

参考文献

- 小川利夫・高沢武司編（1967）『集団就職－その追跡調査－』明治図書出版。
- 川畑和也（2019）『「金の卵」と呼ばれて－十五歳・集団就職の軌跡－』学研プラス。
- 栗原光政（1964）「瀬戸市の陶磁器産業」地理9-12, 13-19頁。
- 澤宮 優（2017）『集団就職－高度経済成長を支えた金の卵たち－』弦書房。
- 瀬戸公共職業安定所（1961）『陶都労働市場10年のあしあと』瀬戸公共職業安定所。
- 瀬戸市史編集委員会編（2003）『瀬戸市史民俗調査報告書三－赤津・瀬戸地区－』瀬戸市。
- 瀬戸市制70周年記念誌編集委員会編（1999）『瀬戸市70年のあゆみ－写真でつづる70年のあゆみ－』瀬戸市。
- 瀬戸陶磁器工業協同組合61年史編集委員会編（2018）『瀬戸陶磁器工業共同組合 六拾壹年史』瀬戸陶磁器工業協同組合61年史編集委員会。
- 十名直喜（2008）『現代産業に生きる技－「型」と創造のダイナミズム－』勁草書房。

- 中村儀朋（2014）「瀬戸ノベルティの百年」, 田村 哲・愛知県陶磁美術館『企画展 魅惑の陶製人形－ノベルティ, 人物俑, はにわ, 土人形, フィギュリン－』愛知県陶磁美術館, 9-15 頁。
- 中村儀朋（2019）「フォトコラム 戦後の一大叙事詩－集団就職－」, 樹林舎編『写真アルバム 瀬戸・尾張旭の昭和』樹林舎, 184-192 頁。
- 成田龍一（2016）『「戦後」はいかに語られるか』河出書房新社。
- 萬年社編（1971）『人こそすべて－林紡績二十五年の歩み－』林紡績株式会社。
- 山口 覚（2016）『集団就職とは何であったか－〈金の卵〉の時空間－』ミネルヴァ書房。
- 山口 覚（2018）「就職列車と就職船－戦後大分県の集団就職に見る集団赴任の展開－」関西学院史学 45, 1-31 頁。
- 湯澤規子（2018）『胃袋の近代－食と人びとの日常史－』名古屋大学出版会。

資料 1 A 氏・B 氏の就職と瀬戸市への赴任

【A 氏】 1938 年鹿児島県加世田市生まれ。10 人兄弟の 7 番目であり、貧しい家庭で育った。1954 年の中学校卒業時には体重が 38 kg 程度だった。体力が必要な紡績業では身長と体重が条件とされたが、陶磁器産業では体が小さくても大丈夫だった。丸利商会の「集団就職 1 期生」として同級生 34 名とともに入社した。国分公共職業安定所の扱いで、10 社ほどの関係者とともに 24 時間ほど列車に乗って集団赴任した。名古屋駅に着き、会社が用意したバスで瀬戸市にやって来た。

【B 氏】 1943 年宮崎県串間市生まれ。1959 年に中学校を卒業し、同市内の洋裁学校に 1 年間通っていた。翌 60 年、川藤電陶で働いていた知人が帰省した際に凄く良い格好をしていたのに憧れて、外に行きたくなった。その知人が瀬戸市へ戻る際に同行し、同社に就職した。川藤電陶は宮崎県の串間市と日南市の卒業生だけを採用していた。夜行列車の高千穂号で 1 日ばかりでやって来た。小さい時から乗り物酔いをするので、本当に大変だった。

聞き取り調査による（資料 2～5 も同じ）。

資料 2 A 氏・B 氏の労働と余暇活動

【A 氏】 労働時間は 8 時から夕方 5 時。「貿易物」のノベルティを作った。粘土を押し出して人形に帽子などを付けていく。5 人ぐらい同級生と並んで競争しながら作業していた。テレビだとカベンゾールといった手を洗う薬剤の臭いがきつく頭が痛くなった。労働環境は悪かった。

バイヤーが外国のテレビを寮に持ってきたが、テレビは見なかった。寝るのが早くて買い物に出ることもなかった。寮母は寮の管理をし、食事係の人が給食用の大きなナベで食事を作っていた。休みは月 2 回、1 日と 16 日。休みの日には出店が多く出ていた末広町商店街や宮前に行った。瀬戸に来て瀬戸映画館で 2 本だけ映画を見た覚えがある。とにかくお金がなかったので遊びに行く余裕はなかった。給料は安かった。1954 年で 4000～5000 円。食費が月 1700 円。親に仕送りをしていた。

山行きは、4 月には日帰り、10 月には 1 泊 2 日で、最初の年は犬山の成田山、秋は京都だった。観光バス 3 台で熱海に行ったこともある。

【B 氏】 仕事は 8 時から夕方 5 時まで。忙しい時には夜中の 10 時までの残業もあった。最初に硫黄を使う作業を担当したが臭いがひどかった。マスクなどない。頭が痛くなるので配置を変えてもらった。水拭き仕上げとか。硫黄の作業以外はさほど大変ではなかったが、土を削る時に出るホコリは大変だった。

寮生活は同郷者ばかりであり楽しかった。寮母が食事を作っていた。九州は白味噌なので、赤味噌が飲めなかった。寮は 3 階建てで、もともとはダンスホールだったみたい。テレビはあった。娯楽といっても映画ぐらい。今のように喫茶店に入ることもなかった。休みは月 2 回で 1 日と 16 日。15 日に前借りできたが、代わりに給料から引かれる。

給料は 4000～5000 円。送金したことはない。安かったので親に仕送りをしてもらったことがある。服などを買ってしまったら残らない。「あそこは給料が良いよ」と聞くと転職も考えないではなかったが、転職する勇気がなかった。

山行きでは鬼怒川温泉に行くなどした。会社持ちで、観光バスで行った。

資料 3 博雲陶器での労働と男子寮での生活（1958～1960 年）

博雲陶器では男子寮・女子寮に各 40 人、計 80 人ほどいた。男子寮は木造 2 階建てで、1 階には食堂と風呂があり、1・2 階に 6 畳間が 10 部屋ほどあった。女子寮は離れた位置にあったが、工場との往復は息抜きになったのではないかと。

7 時頃に起床、寮母が作った朝食を食べて 8 時から仕事。12 時から 12 時 45 分まで昼食・昼休み。仕事を再開し、15 時から 15 分の休憩があった。日給月給なので残業したい。残業のない会社には来ない。

寮生は三食付きだった。寮の食事はそんなに悪くなかった。たくさん食べられる。残業時間にはうどん屋から出前を取って夕食を食べて帰ってきた。寮生はその支払いは必要だった。寮には娯楽室のようなものはなかった。徹夜麻雀をやってこそ一人前という時代だったが、朝になれば仕事をした。休みは 1 日と 16 日だけだった。『蟹工船』とか『あゝ野麦峠』のようなことはなかった。モノのない時代で豆かすとかアメリカから来たトウモロコシの粉末といったものを食べて苦労していたので、白いご飯を食べられることは最上だと思っていた。田舎から来た子は質素だった。医者もそれほどかからなかった。病気で故郷に帰ったという話は覚えがない。中学校卒業生だから若く元気が良かった。ただ、他社の寮もそうだろうが、盲腸（虫垂炎）になる者が多かった。

資料 4 池田丸ヨでの生活（1950年代末頃）

木造の寮には各自の部屋、食堂、レクリエーション室があった。各部屋は2～3人とか4～5人、男性だと2人とか。まだ学生の延長なので、会社の方でバレーボールやったり野球チームを作ったりと、楽しくする工夫はしていた。

食事は1日4回。寮の食事は寮母が作っていた。勤務時の食事は社長夫人の采配で、寮母や事務員数人がかりで用意した。工場でご飯を炊き、工場に近かった末広町商店街の店で「今日はコロッケ200ね」とか「天ぶら300」と注文した。夜食は夜中の9時や10時で、チキンラーメンの日もあれば、うどんを150人分注文することもあった。

1日と16日の休みは本当に大切で、正月ぐらい嬉しい。休みには映画館に行ったり、年頃だから名古屋へ遊びに行く者もいた。山行きでは愛知県立森林公園や愛知県犬山市、各地の温泉に寮生を連れて行く。福利厚生で、しかも儲かっていたからあちこちに行った。今で言う海外へ行くような感じで日光東照宮に行ったこともある。

資料 5 A氏・B氏の離職および瀬戸市への再就職移動

【A氏】1957年5月に鼓膜の手術をした後に丸利商會を退職した。鹿児島県から出てきた兄が美容院をやっていた大阪に行った。子供のお守りも兼ねてそこに10ヵ月いて、鹿児島へ帰った。鹿児島市内で兄嫁が仕事を探してくれたが、そこは昼間はラーメン屋、夜は飲み屋になるという店で、10ヵ月いた。9時から24時までの勤務で月4000円という低賃金。1954年で4000～5000円という丸利商會の方がまだ良かった。

1959年6月、丸利商會に勤めていた2つ下の妹から瀬戸市の愛龍社で求人していることを教えられた。「お尻が痛くなる」ということで絶対に瀬戸には来なくなかったが、同社に入社して5年間いた。知人の紹介で、長崎県出身で大竹タイル（大和窯業）で働いていた男性と知り合って、25歳で結婚した。結婚後は内職で招き猫の仕上げ作業をした。

丸利商會では長期間勤め続ける人は珍しかった。みんな厚生年金の一時金をもらうために鹿児島県の国分に帰る。しかし寮母さんの紹介で瀬戸市で結婚した人もいた。

【B氏】川藤電陶では3年8ヵ月勤め、1964年、20歳の時に結婚しようと思って帰郷した。しかし家で百姓をする気にはならなかった。3ヵ月後には串間市出身の友人をつととして愛知県常滑市の織布工場に入社した。

1965年の正月に、川藤電陶に勤めていた同郷者のところへ遊びに来た。その際に工場長から「またうちで働いてくれ」と言われて再び川藤電陶に入社した。織布工場に不満があった訳ではなく、たまたま瀬戸市に来て、もう1度働くようになった。常滑市で働いていた友人までそこを辞めて川藤電陶に転職した。1968年に27歳で結婚するまで同社で働いた。結婚相手は熊本県の天草出身者。
